レッスン2　単身赴任

The following essay has been recorded on the cassette.

本文 *MAIN TEXT*

単身赴任

新聞を開くと、単身赴任に関する特集記事が大きくのっているのが目についた。なれない手つきで炊事にいどむ中年の男性の姿や、電話代を切りつめるために特別な合図を工夫した主婦の話など、写真入りで伝えている。

国を離れることの寂しさ・悲しさは、昔からしばしば文芸作品の題材になっている。古く万葉集の防人の歌は、老いた両親を残して長い旅路につく若者の心配や、残される妻の嘆きなどを生き生きと伝えている。そのひとつが、突然頭に浮かんできた。ざっと現代語に直すと、

「今度防人に行くことになったのはどこのご主人？」などと、のんきそうにきいている人を見ると、なんと幸せな人かと、うらやましくてたまらなくなる、

という意味の歌である。

この「防人」を「単身赴任」とおきかえてみると、万葉集の時代から現在までの千年あまりの歳月が、うそのように消えていく思いがする。

苦しい戦争が終わって平和が訪れ、物質的に豊かな生活が送れる日が来たというのに、依然として夫婦や親子がひとつ屋根の下で暮らせない家庭が、数十万もあるというのは、どういうことであろうか。

新聞をたたむ手をとめて、自問自答せずにいられなかった。